震災時の透析拠点病院としての役割

（我妻裕子、ナース発　東日本大震災大震災レポート、東京、2011、p.189-194）

2016 年 5 月 20 日、災害医学抄読会 http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/

仙台社会保険病院は、病床数 428 床の急性期病院で宮城県における腎疾患の最終拠点病院である。腎炎・腎不全では、予防・診断・治療から、血液透析、腎臓移植、周辺の合併症までの一貫した治療を行う。

2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分、仙台市は三陸沖を震源とするマグニチュード 9,0 の国内観測史上最大の地震に見舞われた。仙台社会保険病院も未曽有の地震によって、書架やコンピューターモニターなどが倒れ、床は散乱物で埋め尽くされた。さらに、壁にも亀裂が入っていた。幸いにも津波の影響は受けなかった。

《災害時の状況》

①震による壁の亀裂が目立ったこと、余震が続いていたことから全病棟の患者さんを玄関前広場に担送した。

②傷のひどい第 2 病棟を使用不可と判断し、第 3 病棟と透析室に第 2 病棟の患者さんを移動させた。そのため、11 日の夜間透析は中止された。翌日から更衣室に臨時病室を設けることで透析が可能となった。

③2 系統の自家発電装置のうち、1 系統は地震により故障したが、もう 1 系統が透析室と手術室に配電されていたため、透析が可能であった。迅速な上水道の復旧により、水不足による透析困難は免れた。

④県内 53 施設ある透析施設のうち震災により、7 割が透析困難となった。最大の原因は停電と断水である。その他、施設の破損、津波による浸水・流失が原因である。

⑤仙台社会保険病院では、県内外から透析を必要とする患者さんを受け入れた。3 月 12 日からの 1 週間で宮城県内 36 施設から延べ 1108 人の透析患者を受け入れ、1973 件の透析を実施した。

⑥多くの患者さんに対応するために、通常 4 時間の透析を 2.5 時間に短縮し、24 時間のうちに 8 クール行った。患者さんには、申し込みをして透析開始時間の予約後、いったん帰宅し、予定時間の 1 時間 30 分前に来院してもらった。

《災害時の問題》

① 各透析施設からの連絡手段

仙台社会保険病院に運ばれる際の連絡は MCA 無線を用いていたが、停電下において、バッテリー不足によって最終的に固定電話が用いられた。または、スタッフが直接仙台社会保険病院へ出向く形で行われた。電話対応に追われる中、電話連絡なしに来る救急車の対応に苦労した。

② 患者さんが多い

県内外からの患者さんを一挙に受け入れたため、受付に数百人の列ができるほどだった。

《震災で感じた事》

院内の異なる職種のスタッフ間とのチームワークやコミュニケーション、院外の地域医療施設スタッフとの連携の重要性を感じた。